



## サタンと盟友

暗唱  
聖句

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」（黙示録 12：17、口語訳）

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」（黙示録 12：17、新共同訳）

今週の  
聖句

黙示録 13 章、黙示録 17：8、ダニエル 7：24、25  
Ⅱテサロニケ 2：2～12、黙示録 12：14～16、列王記上 18：38

安息日  
午後  
2/23

### 今週のテーマ

黙示録 12 章は、神の忠実な民に対するサタンの攻撃を描いています。その攻撃には、1260 日〔年〕（西暦 538～1798 年、黙 12：6、13、14、第 7 課火曜日参照）にわたる異教ローマとその後の教皇制ローマによる迫害も含まれています。黙示録 13 章は、キリスト教史を通じてなされたサタンの攻撃を更に詳しく説明しており、その攻撃は、いずれも獣として描かれている二つの盟友の助けを得て行われました。サタンの指図のもと、竜とこれら二つの獣は、時の終わりに団結して、神の贖いあがなの働きに反対し、この世の忠誠を勝ち取ろうとします。

注意書きが一つ必要です。過去においてすでに成就した預言を解釈することは、比較的簡単です。しかし、まだ成就していない預言を扱う際には、火曜日の研究できるように、私たちはより慎重である必要があります。神は、私たちが驚かないように、終末時代にどういうことが起こるのかを示してくださいますが、私たちが知りたいと思う詳細のすべてを教えることはなさいません。

これらの預言が終末に起こることを教えているとしても、終末の諸事件がいつ、具体的にどのように起こるのかは述べていないということを、私たちは常に覚える必要があります。それゆえ私たちは、預言が語っていることを超えて推測しないように注意しなければなりません。黙示録の預言には実際的な目的（現在をいかに生き、未来にいかに備えるかを教えること）があるということを忘れないようにしましょう。

黙示録 13:1～4、8と17:8を読んでください。ヨハネは、不思議な獣が海の中から上って来るのを見ます。獣は政治的勢力をあらわしますが、この海の獣の描写は、顕著な特徴として宗教を持つ政治的な勢力を示しています。海は人口の多いヨーロッパ地域を象徴しており、海の獣はこの海から出て来て、ローマ帝国滅亡後に権力の座に就くのです（黙 17:15 参照）。

ヨハネは、この獣が水の中からあらわれたと説明しています。この獣は、黙示録 12:3、4 の竜と同様、七つの頭と十の角を持っており、そのことは異教ローマとの密接なつながりを示しています。獣の頭の上には神を冒瀆する名が記されており、角には王冠があります。獣の複数の頭は、歴史を通じてサタンが神の民を迫害するために用いてきたさまざまな王国です（黙 17:9～11 参照）。神を冒瀆する名前は、この獣が主張する聖なる称号を指し示しています。十の角はダニエル 7:24 を指し示しており、それらは、ローマ帝国が滅亡したあとにそこから興った国々を象徴しています。海の獣のこれらの特徴はみな、ローマ帝国から生じた教皇制を指し示しています。

海から上って来た獣は、熊の足と獅子の口を持つ豹ひょうに似ていました。従ってこの獣は、ダニエル 7:2～7 に登場する四つの獣（バビロン、メディアとペルシア、ギリシア、ローマという世界帝国の象徴）の特徴を併せ持っています。しかしヨハネは、それらの順序を逆に列挙しており、そのことは、西暦 1 世紀の視点からすると、この海の獣がダニエル 7 章の第四の獣、ローマ帝国と関わりがあることを示しています。

竜（サタンによって力づけられた異教ローマ）はこの獣に、自分の力と玉座と大きな権威を与えました。父なる神が御自分の玉座と権威をキリストにお与えになったように（黙 2:27）、サタンは、地上における自分の共同支配者かつ代表として、この獣を任命するのです。

黙示録 13:5～7 は、キリスト教史を通じて、獣による迫害の活動期間が 42 か月であると述べています。清い女への迫害が「一時期、二時期、そして半時期」、つまり三時期半、預言的には 3 年半続くことは、先に触れたとおりです（黙 12:13、14、さらにダニ 7:25 と比較）。それゆえ、「一時期、二時期、そして半時期」「四十二か月」「千二百六十日」は、いずれも 1260 年という同じ期間を指しています。この段階は、ヨハネが見ていて、「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われた」（黙 13:3）ときに終わります。しかしその後、この「致命的な傷」が治ることは、獣が生き返り、力を回復する 1798 年以降の時を指しているのです。しかし傷が治ると、獣は生き返ります。致命的な傷の回復によってこの世は感嘆し、人々は竜と獣を拝みます

黙示録 13:5 は、きのうの研究で見たように、迫害の期間を特定しています。獣が活動する 42 か月は、黙示録 12:6、14 における女（教会）に対する迫害の期間の 1260 日（年）と同じ期間です（預言的「1日」は「1年」を象徴します〔民 14:34、エゼ 4:6〕。第 7 課木曜日の研究を参照）。いみじくも、西暦 538 年がこの預言の期間の始まりとなり、その年に、教皇を頭とするローマ教会は、中世を通じて西洋諸国を支配した教会国家権力を確立しました。1798 年、フランス革命の諸事件が獣に致命的な傷を負わせ、それによって教会の抑圧的支配と国が権力を与えた宗教が一時的に終わりました。

**問 1** 黙示録 13:5～8 をダニエル 7:24、25、Ⅱテサロニケ 2:2～12 と比較してください。海の獣の活動は、「小さな角」や「不法の者」の描写とどのように似ていますか。

預言的 1260 日（年）間の海の獣の活動は、「冒瀆<sup>ぼうとく</sup>」という言葉で述べられています。新約聖書において冒瀆とは、神との平等を要求することや（ヨハ 10:33、マタ 26:63～65）、神の権威を奪うこと（マコ 2:7）を意味します。海の獣は、「神を冒瀆し、神の名と神の幕屋、天に住む者たちを冒瀆した」（黙 13:6）。神の住まいは天の聖所（幕屋）であり、そこではキリストが私たちの救いのために働いておられます。海の獣は、キリストの執り成しの働きを、救いと、冒瀆の本質である罪や行為の赦しを与えると主張する、人間の司祭職に置き換えることで無効にするのです。神にのみ属するこのような権力を横取りすることが、冒瀆の本質です。

黙示録 13 章は、キリスト教における大規模な背教の時代を指し示しており、それは、ローマ・カトリック教会が教皇を頭として神の地位と権威を要求したときに成就しました。ローマへの服従を拒んだ者たちは、迫害や殉教を経験しました。今日、こういうことを言うと、厳しいとか、頑迷だとかみなされますが、歴史を消し去ることはできません。ある人たちがどれほどそうしたいと願ったとしても……。

◆ 私たちは教会史に関する預言に忠実であり続けながらも、これらの真理を人々に紹介する際には、どうしたら親切かつ慎重でいられるでしょうか。

黙示録 13 章の前半は、預言期間 1260 日（年）の間に活動的なローマ・カトリック教会の権力を描いています。この政治宗教制度は、フランス革命の諸事件によって致命的な傷を負いました。しかし、その致命的な傷はやがて治り、この制度を生き返らせます。この章の後半は、獣の致命的な傷が実際にどのように治ったのかを説明しています。

黙示録 13:11 を読んでください。ヨハネは、もう一つの獣が現れるのを見ます。最初の獣と違い、第二の獣は地中から上って来ます。この第二の獣は、最初の獣と同じくらいの影響を持つ世界的勢力です。しかし、恐ろしい外見をしていた海の獣とは異なり、この陸の獣は、少なくとも最初、無害に見えます。「小羊の角に似た二本の角」（黙 13:11）を持っており、小羊というのはキリストの象徴です。それゆえ、この終末時代の勢力は、キリストのような外見をしています。

この勢力は、預言期間 1260 日（年）の終わりに、竜の迫害の水から女（神の真の教会の象徴）を守った地域から登場します（黙 12:14～16）。この陸の獣は、明らかに新しい登場者であり、フランス革命の諸事件の中で海の獣が致命的な傷を負ったあとに世界的勢力として登場しました。つまり、陸の獣は、もっぱら終末時代の登場者だということです。

「1798 年に、新世界のどんな国が、勢力を伸ばし、将来強大な国家になる可能性を示して、世界の注目を集めていたであろうか。この象徴が、どの国に適用されるかは、実に明白である。この預言の指示するところに合致する国は、ただ 1 つしかない。それは、疑いもなく、アメリカ合衆国を指している」（『希望への光』1808 ページ、『各時代の争闘』下巻 159 ページ）。

しかし黙示録 13:11 は、大多数がプロテスタントであるアメリカが、やがて竜のように、つまり悪魔のように、ローマ帝国と似た世界的影響力を持って話し始めるだろうと教えています。この終末時代の勢力は、全世界に（かつて致命的な傷を負った）最初の獣を拜ませる道具になるのです。言い換えれば、かつて教会に保護と安全な逃れの間を提供したアメリカ合衆国が、終末の諸事件の中のある時点で、迫害する役割を演じるだろうということです。

◆ アメリカ合衆国が黙示録 13 章の第二の獣だと特定されたとき、アメリカには現在のような力も影響力もまったくありませんでした。この事実は、先の預言の中に描かれている勢力をアメリカ合衆国と特定することを支持するうえで、いかに役立ちますか。

黙示録 13:12、13 を読んでください。列王記上 18:38 と使徒言行録 2:3 は、小羊に似た獣の惑わしの活動です。奇跡を行うことで、小羊に似た獣は、聖書とまったく調和していないのに、自分の言葉が真実であると、多くの人を信じ込ませるでしょう。「心霊術を通して奇跡が行なわれ、病人はいやされ、否定することのできない多くの不思議なことが行われる」(『希望への光』1885 ページ、『各時代の争闘』下巻 350 ページ)。このような奇跡は、致命的な傷を負った海の獣の像を造るよう、地球の住人を説得するうえで小羊に似た獣の助けとなります。

海の獣の致命的な傷が治ったことは、宗教的、政治的権力としてローマの教皇制の復活を指します。小羊に似た獣も竜のように話し始め、海の獣の力を行使し、これらの象徴によってあらわされる国々のように不寛容になることを示しています。

「このような行動は、この政府の原則、自由制度の精神、独立宣言の率直厳粛な言明、そして憲法に、全く相反するものである。……しかし、そのような矛盾した行動をとることは、象徴に示されているとおりである。小羊のような角を持った獣は、純潔柔和で悪意のないことを公言しながら、龍のように物を言うのである。

『地に住む人々を惑わし……(彼らに) 獣の像を造ることを……命じた。』ここに、立法権が国民にある政体が明示されている。これは、合衆国が預言に示された国であるというきわめて顕著な証拠である。

しかし、この「獣の像」とは何であろうか。そして、それは、どのようにして造られるものなのであろうか。この像は、2本の角を持った獣によって造られるものであり、先の獣に模した像である。それは、また、獣の像とも呼ばれている。したがって、像が何であり、どのようにして造られるかを知るためには、獣そのもの、すなわち法王権の特徴を研究しなければならない。

初代教会は、福音の単純さを離れて墮落し、異教の儀式と習慣を受け入れた時に、聖霊と神の力を失った。そして、人々の良心を支配するために、世俗の権力の援助を求めた。その結果が、法王権であって、それは、国家の権力を支配し、それを教会自身の目的、特に『異端』の処罰のために用いた教会であった。……米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるその時に、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反対者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである。……『獣の像』は、プロテスタント諸教会が自分たちの教義を強制するために公権力の助けを求める時に起きてくるところの、そうした背教のプロテスタント教会を表している」(『希望への光』1809、1810、1812 ページ、『各時代の争闘』下巻 161～163、165 ページ)。

黙示録 13 章は、小羊に似た獣が最後の局面の中で指導的役割を果たすことを示しています。この世界的勢力は、人々の信仰を統制しようとして、地球規模の制度を設けるのです。この制度は、教皇の支配下にあった中世のキリスト教に酷似しています。

**問2** 黙示録 13:16、17 を申命記 6:4～8 と一緒に読んでください。刻印を右手や額に押すことは、神の掟とどのような関係がありますか。

あらゆる社会階級の人々が、右手か額に獣の刻印を受けるように圧力をかけられるでしょう。額に押される神の印が神のものとみなされる人々を明らかにするよう（黙 7:3、4、14:1）、獣の刻印は、獣の礼拝者を明らかにします。

獣の刻印は、目に見えるしるしではありません。右手か額に押すことは、モーセがイスラエルの人々に、しるしとして神の律法を右手か額に結びつけなさい、と命じたことの偽物です（申 6:8）。右手は行為と関係があり、額は思考や同意と関係があります。死の脅威を避けるために、獣の像を拜むことを選ぶ人もいれば、この背教の礼拝制度を心から、霊的にもすっかり支持する人がいます。

最後の局面における中心問題は、礼拝と、神の掟を守ることによる神への服従です（黙 14:12）。とりわけ、安息日の掟が神に対する忠誠と服従の試金石になります。安息日が忠実な神の民の際立った服従のしるしであるように（エゼ 20:12、20）、獣の刻印が獣に対する忠誠のしるしです。

獣の刻印は、人間の掟を神の掟に置き換えることを伴います。この事実の最大の証拠は、創造主によって聖書の中で命じられている第七日安息日の代わりに礼拝日として人間が設けた日曜日の制度です（ダニ 7:25 参照）。

神の權威のしるしをほかの日に換えようとする試みは、神御自身の役割と力を奪おうとする試みです。「獣の刻印は、法王制の安息日で……ある。……偽りの安息日施行の法令が出て、第三天使の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して警告を発するに至る時に、……罪を犯し続ける者が獣の刻印を受けるのである」（『伝道』上巻 318 ページ）。

黙示録 13:18 には、「ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である」と記されています。この人間はだれでしょうか。パウロはこの人間を「不法の者」（Ⅱテサ 2:3）と呼んでいます。この呼称は、海の獣によって象徴される教皇権を指しています。獣の頭の冒瀆的な名前は、獣が自分のものだと主張する神の称号を指しており、獣は地上で神の子の代理を務めるとされています。

黙示録は、安息日が歴史の終わりにおいて服従のしるしになるだろう、と教えています。しかし現時点において、ある人が日曜日を順守していることは、彼／彼女が獣の刻印を押されていることを意味してはいません。私たちはそのことを覚えている必要があります。日曜日順守が「獣の刻印」になるのは、世の中の惑わしや、礼拝日を選ぶことに関する問題をはっきり知っているにもかかわらず、人々が神に従うか、従わないかの選択をしたときです。しかし、その時はまだ未来のことです。

「まだ、だれも獣の刻印を受けていない。まだ、テストの時が来ていない。真のクリスチャンは、すべての教会の中にいるのであって、ローマ・カトリック教会も例外ではない。彼らに光が与えられて、第四条の戒めを守るべきことがわかるまではだれもとがめを受けない。しかし、偽りの安息日施行の法令が出て、第三天使の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して警告を発するに至る時に、偽りと真理との間の境界線がはっきりと引かれる。その時、罪を犯し続ける者が獣の刻印を受けるのである」(『伝道』上巻 318 ページ)。

安息日順守によってだれも救われないように、今日、日曜日順守によってだれも失われないことを覚えましょう。しかし、「獣の刻印」が重要な問題となり、礼拝日を選ぶことが忠誠の試金石になる時が、やがて来ます。黙示録は神の民に、聖書を手に取って、内省の精神を持ちつつ預言の言葉を自ら研究し、今日、福音が伝えられていない人たちに福音を伝える努力をキリストのために全力でするように、と訴えています。

### 話し合いのための質問

- ① 私たちが終わりを待つときに、他教派のクリスチャンに対して、どのような態度を取るべきですか。次の勧告について考えてください。「私たちの牧師は、ほかの教派の牧師たちに近づこうとすべきである。キリストが執り成しておられる彼らのために祈り、また彼らとともに祈りなさい。彼らの責任は、<sup>げんしよく</sup>厳粛なものである。私たちはキリストの使者として、それらの群れの羊飼いたちに、深く、熱心な関心を示すべきである」(『教会への証』第6巻 78 ページ、英文)。
- ② 他教派のクリスチャンに対する態度において、どのようにして私たちは、優越的な態度やクリスチャンにふさわしくない精神をあらわさないようにできますか。私たちの信仰を妥協させることなく、彼らと彼らの個人的信仰に対する敬意を、いかに示すべきですか。